

黒川文庫蔵『竹取物語』関係書籍について

山崎正伸

実践女子大学図書館の黒川文庫には、竹取物語関係書籍として、寛文三年（一六六三）板の『竹取物語』と、天保二年（一八三一）板の『竹取翁物語解』に、そして、刊年不明の『絵入竹取物語』の板本が所蔵されている。

寛文三年板の『竹取物語』には、一丁表上部余白に、

明和九年辰九月五日得此活本即校合 一ト云ハ活本也左ニ〇点ハ活本ニ无也（以上墨）

青 青蓮院尊鎮親王真跡本（以上未墨）

と、明和九年（一七七二）壬辰に、古活字本と校合したと記されている。青蓮院尊鎮親王本との校合は、最終丁である下巻十九丁裏の匡郭内左隅に、「慶應の二とせむつきはしめつかた青蓮院尊鎮親王のかゝせ給へる本にむかへて一わたりよみをはりぬすかはらの夏しけ」とあって、慶應二年（一八六六）正月に、菅原夏しげによって校合されたものと知られる。この菅原夏しげが、前田夏蔭（菅原夏蔭）の息子の前田夏繁であれば、慶應二年は数え年で二六歳の正月ということになる。

この古活字本との校異箇所は二三五箇所、青蓮院尊鎮親王本との校異箇所は二七八箇所に及ぶ。また、上部余白の書き込

みは、

活本さかへけりの句なくて書入たる句あり（上二丁表）

うみ山の云々哥一本次の哥の如く下けて書りこゝもさるへし（上七丁表）

一本の如くなんは辞なるへし南とかけるは誤（上十二丁裏）

一本彼衣とありかの衣かか衣か（上十六丁表）

一本くゝとあるはとの重点くゝと成たる也（上十九丁裏）

むかはせ給ふを一本問はせ給ふと有問を向に誤（下一丁裏）

衣は哀を写あやまれり（下十八表）

と七箇所ある。これを、田中剛直氏の『竹取物語の研究』⁽¹⁾の刊本相互の異同一覧表と照合すると、「活本さかへけりの句なくて書入たる句あり」は古活字十行甲本（以下「十甲」と記す）と、十一甲・十一乙本に一致する。「一本彼衣とありかの衣かか衣か」は、十甲・十一乙・十二乙が一致する。「一本くゝとあるはとの重点くゝと成たる也」は、十一乙が一致する。「むかはせ給ふを一本問はせ給ふと有問を向に誤」は、十甲・十一甲・十二乙が一致する。また、本文の脇に書き込まれた校合も、古活字本と正保三年板本との異同箇所のみならず、以下の如く、

さるきのみやつこ（上二丁・表・三行）
か青

三すんはかりなる人（上二丁・表・六行）
のる

かきりなし（上二丁・裏・一行）
も青无

たけ取に（上二丁・裏・三行）
を

こかねある竹（上二丁・裏・四行）
の青无

はしらせんかへさせ給ふ（上二四丁・裏・二一行）
む きぬ

かは衣（上二六丁・裏・七行）

聞ととはするに（上二九丁・裏・四行）
云

こたへていはく（上二九丁・裏・五行）

書はつる〇（下五丁・表・七行）
より

申さん事^{青は}（上四丁・表・二行）

れいの^{人青元}あつまりぬ（五丁・表・九行）

をくらの山^{〇青}（上七丁・表・二行）

たくら^{〇青}を^{青元}（上八丁・表・九行）

いへは^{〇青元}あひ奉る^{おきな}（上九丁・表・一行）

有時^{〇青元}いはんかたなく^{には}（上一〇丁・裏・三行）

誠^のほうらいの木^の（上一三丁・表・三行）

と、古活字十一行乙本独自の本文に関わる部分が全て一致する。これによって、明和九年に校合した古活字本は十一行乙本と知られる。

青蓮院尊鎮親王本との校異箇所二七八箇所については、現存する一つの伝本に一致するというものは確認できない。独自本文と思われる箇所は、

①花を折てまうて来る也^{たり青}（上一二丁・裏・五行）

②世にたとふへきにあらさりしかと此えたを^{す青}（上一二丁・裏・六行）

③七日にまうて来る文^{青元}（上一五丁・表・二行）

④やつれたまひて難波の邊に^{青元}（上一九丁・裏・一行）

⑤かかるわひしきめ^{を青}見す^{し青}（上一〇丁・表・六行）

⑥目はしらめにて^{し青}（下三丁・裏・二行）

なし給ひそ^{たまふ}（下五丁・裏・一行）

つか^出〇まつらせて^ら（下五丁・裏・四行）

なをめておはしまさん^{すま}（下八丁・裏・九行）

たゝひとり過し給ふ^{すま}（下一〇丁・表・二行）

大きさを^に（下一二丁・表・二行）

くすり入り^{いれ}（下一〇丁・表・二行）

とめすなりぬるを^事（下一八丁・裏・一〇行）

と九箇所認められる。そして、中田剛直氏が第一類本系統第一種とされる武藤本・平瀬本・高山本と十行甲本との独自共通異文とされる一三項に合わせると、

と、三箇所が一致する。また、「全三本は一致せず互ひに異文を形成しているが、正しくは三本一致の独自共通異文」とされる六項のうち、

と、二箇所が一致する。他にも、

- ① 彼うれへせし を青 たる青 たくみをは (上一三丁・裏・三行)
- ② かね少にこそあなれ 青かならすおくるへきものにこそあなれ うれしくして (上一五丁・裏・一行)
- ③ よろこひて 青无 (上一三・裏・六行)
- ④ こんじやうの色なりけのすゑ 青 青三字无 (上一五・裏・六行)
- ⑤ よき人に 青无 (上一六・裏・五行)
- ⑥ よみ給ひける哥 青无 (上一七・表・八行)
- ⑦ 汝ら きんち青 (上一八・表・七行)

⑥ ひとつのふたに入られ給ふ(下四・裏・二行)

三字青元

⑦ なし給そかうふり(下七・裏・一行)

たまふつかさ青

青元

⑧ かねうにて(下二〇・表・六行)

青元

⑨ 春の初よりかくや姫月の(下二〇・表・七行)

青元

⑩ 御心まとひぬ(下一七・表・二行)

青元

⑪ いさゝか(下一七・裏・二行)

など第一類の本文と一致する。また、前記夏しげの筆で奥付の「寛文三稔癸卯仲秋吉辰長尾平兵衛開板」の右に、「イ年号ナシ 茨城多左エ門板トノミアリ」とあって、絵入竹取物語との校合も行われたと知られる。

また、天保二年板の『竹取翁物語解』には、黒川真頼の書き込みがある。読点や続けて読むという記号の書き込みを除いて、文字による書き込みがほぼ二〇〇箇所ほど認められる。その中から特徴的なものを挙げると、

① 帝のめしでの給はむこと 致云帝ノ召アリテ詔アラソコトといふ意なりこは宮中にめされておふせをあらんことゝいふにて今よりゆくさきをかねていへるなり

弘恭云点注にあふせこととあるは筆誤にやおほせことの誤なるべし

(巻四・二九・表・上部余白)

② 弘恭云国王の伝事をそむかば語按違へるやう也もとは背へとかきてソムケバとよみけんを写し誤れるにやかバとありては前後の文に似つかず次にはや殺し給ひてよかしとあるを味ふべし

(巻四・三二・裏・上部余白)

③ 〇五十はかり云云 弘云これはわさと五十といひしかとおもはる其の故はこの事をなかくによりて髪もしろく腰もかゝまりなとあれば五十はかりにてはよのつねにてはさはあらぬをこの頃のもののおもひによりてかく縁に老たりといはんとて五十はかりとつくりことせしなるべしさらにはまことの年をいへるにはあらずと見るへし

と、三箇所に真頼門下生鈴木弘恭の考察が書かれている。弘恭には、明治二十一年（一八八八）の『^{（2）}参考竹取物語』がある。これと合わせる、

○たのみをかけたり□^{承上}あながちに

□後世ノ文ニテハ此ヘキラズ下ノ部余白

（巻一・三一・裏・脇注・下部余白）

△標注▽師説此ところにて切るゝは古格也

○を考云を以テノ意ナリ下文三十六左見合スベシ

（巻一・二六・裏・上部余白）

○をはよに通ふをなり 再云よくもあらぬかたちを以てあたこゝろつきなバノ意ナルベシコノをハ以テヲ加ヘテ心ウ

（巻一・三六・裏・上部余白）

△標注▽師云此をは以ての意を加へてみるべし

○後くやしき事も有べきをと思ふばかりなり

○サル後悔アリテハイカマハセント思フバカリナリノ意ナリ

（巻一・三六・裏・八行脇注）

△標注▽師云さる後悔ありてはいかゝせんと思ふばかりなりの意也

○十六そ 考云十六竈ナリ竈ハ漢音サウ呉音ソウナリ けど和名抄窓文字集略云窓七經反和名久度竈後之穿也 按ス

（巻二・一一・表・上部余白）

○しらせ給ひたるかぎりハ心をしらせ給ひたるかぎりといふにて腹心ノ者ノ限リシテといふ也十六そは十六竈なりそ

の十六竈を皆々上^{カミ}に窓^{クド}をあけてといふなりこれは硝子を作らんか為也されは凡ての意をいはゝ腹心のものゝかぎりして玉の枝を造たまふといふにて自らもその構のうちに入おはして作るなり

（巻二・一一・表・下部貼紙）

△標注▽師云そはそうがの誤にや竈は漢音サウ、呉音ソウ也とあり、按に十六そを其上にくどをあけてといふ義なるべし、即ちそうは竈也くどは窓也、硝子を製造せる竈^{カマド}なり

○袂タモトかわきて今日ケフこそは見ミめといへり

(巻三・一〇・裏・八行協注)

○きめノ方ヨロシ　きるハ我カ物ニ領スルナリ

(巻三・一〇・裏・上部余白)

△標注▽解きめを見めと有、活本、黒の一本きめとあり、衣の緑なればきめのかたよろしとある師説に従ひつ、

○今はおろしてよクラッ磨ヲサス也翁ヲラッ磨ヲサス也しえたりと宣たまひてあつまりて

(巻四・一四・裏・八行協注)

○翁ハ石上磨のみつからのうへを卑下しておきなとはいへるなるべし伊勢物語にも卑下することは今のおきなまさ

にしなむやなと見えたり

(巻四・一六・表・上部余白)

△標注▽師云翁は石上麻呂みづからのうへを卑下して云也伊セ物語にも例あり下はの給へばなるべしといはれたり按るに旧注によれば翁はくらつまろのこととあり然らば翁ヨと呼びかけたるにて下はの給ひてアレバの意となるべしとある外、一九事例を真頼書き入れから『参考竹取物語』に採用している。このあたりのことは、『参考竹取物語』の凡例

に、

一、此書は。既に田中大秀ぬしがものしたる解といふものありて。契沖阿闍梨の河社の説。小山儀ぬしの抄を始として。諸家の説及び類本数種を校考せられたれば。大かたはそれにてことたるべけれど。其まきの数六巻にわたり。諸説ども多きにすぎて。却りて初学のためには不便なるが如くなれば。今本文のみを挙て一卷とせむとするにあたりて。師の黒川真頼翁の校合本を参考して。解のいまだしき所を補ひ。且れいの段落文法を點註に標記しつれば。更に参考標註の文字を冠せたり。

一、此書に引用したる所の黒本とあるは。我師黒川翁がさきに大学校の生徒に授業し給ひしときに使められたる校本にして。大秀ぬしが解に。青蓮院尊鎮親王本。并に博物局所蔵本。寛文古寫本。活字古板本等を校合し。なほかたぶかるゝ所には。自からの考をも加へられたる書をいふ。又板本とあるは。おのれが所蔵の繪入板本にして。巻尾

に茨城多左衛門板とあるものをいふなり。

とあって、黒川真頼の考察を大いに参考にしたとある。その他の書き入れには、

真按青墨（注 傍線青墨・その他朱墨）

翁のいのちけふあすとしらぬをかくの給ふ君達にもよくおもひさためてつかうまつれと申せば、ことわりなり、□
いづれもおとりまさりおはしまさねば、ゆかしきもの見せ給へらむに、御心さしのほとは見ゆべし、□つかうまつら
むことはそれになむ定むべき』といふ、□
（巻一・四一・裏・挾紙）

とある。ここに該当する『新編日本古典文学全集』⁽³⁾の本文を引くと、

『翁の命、今日明日とも知らぬを、かくのたまふ君達にも、よく思ひさだめて仕うまつれと申せば、』ことわりな
り。いづれも劣り優りおはしまさねば、御心さしのほとは見ゆべし。仕うまつらむことは、それになむさだむべき』
とあって、頭注に、

底本をはじめ諸本「申も」とあるが、「申は」の誤写と解した。「も」が「ん」に誤ったのであろう。このあたり、通
行本系の諸本はこの本文だが、通じがたい。古本系では「いづれも劣り優りおはしまさねば、定めがたし。ゆかし
思ひはべるものはべるを見せたまはむに、御心さしの程は見ゆべし」となっている。しかし古本系は合理化されて
いる面もあるので、これによらず、⁽⁴⁾「ゆかしき物を見せたまへらむに」を受けるとして訳した。
とされ、ここに該当する『新日本古典文学大系』⁽⁴⁾の脚注も、

（申も、こははり也）このままでは解し難いが、一応原文のまま翁が自賛の気持ちを表したものと考えておく。一説
に「申も」を「申は（まうせば）」の誤写として、「ことわり也」を姫の言葉に入れる。（御心さしの程は見ゆべし）
この前に姫の言葉の「ゆかしき物を見せたまへらん」に相当する脱文があろう。

とされているように、本文が乱れているが、この貼り紙は本文を的確に校訂したものである。外にも本文に関わる注も多く、また、典拠についても、

南都七大寺巡礼記 大安寺宝蔵件宝蔵納寺家宝物在八幡大^{〔菩薩〕}井 弓矢釈迦如來石鉢波羅門僧正持來佛舍利云

(卷一・四三・裏・上部余白)

と注される。この他、黒川真頼書き入れの『竹取翁物語解』には、^{〔参考〕}『竹取物語』に引かれたもの以外にも多くの注が朱墨で施されている。

注

- (1) 田中剛直『竹取物語の研究』塙書房(昭四〇・六)による。
- (2) 『^{〔参考〕}竹取物語』^{〔標注〕}△『竹取物語讀本』▽中外堂(明治三二・二二)による。
- (3) 片桐洋一校注訳・新編日本古典文学全集12『竹取物語』小学館(一九九四・一二)二三・二四頁。
- (4) 堀内秀晃校注・新日本古典文学大系17『竹取物語』岩波書店(一九九七・一)一〇・一一頁。